

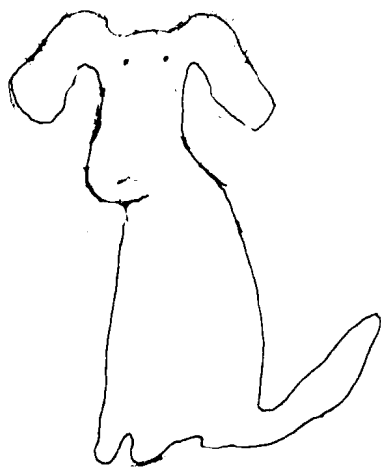
天使

遠藤周作



天使

遠藤周作



天使 遠藤 周作

昭和五十五年三月三十日 初版発行
昭和五十五年五月十日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 電話東京〇〇〇
三三二七二（大代表）／〇〇〇／東京 千九五〇

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
0093-872270-0946(〇) Printed in Japan



目次

天使	二五
嘘	二九
遊子方言——半可通物語——	三〇
科学の不幸	三三
悲喜劇	四七
犬と小説家	五二
駄犬	五五

変装者

一五

女の心

一九

初恋

二三

クワッ、クワッ 先生行状記

三三

あとがき

三七

初出誌一覧

三六

装
丁
和
田
誠

馱

犬

今日は犬の話をしましょう。

わが家には二匹の犬がいる。一匹はシロというて、雑種のメスである。十二年前に近所の牛乳屋に生れた何匹かの一つを私がもらってきた。犬の十二年は人間の七十歳にあたると聞いたが、そんな七十歳の婆さまとは思えんほど齒も丈夫、眼もたしか、魚の尾でも沢庵たくあんでもラッキョでも与えるものは何でも食べる。そして一日中、わが家の藤棚ふじだなの下で前脚まえあしに顔をのせて眠っておられる。

自慢するわけではないが、この犬、NHKのテレビにも出た。しかもあなた、チャネル・ワンのNHKです。

「犬は果して見知らぬ地点から家に戻もどれるか」という実験をNHKが企画した時、どうした理由か（今もって私にもその理由が解げせんが）この犬に主役の白羽がたった。あれを見られた方は日本全国に多いだろうが、アラン・ドロンと獵犬、ピーター・フオンダとコリー犬が出演する場面にまじって彼女も堂々と登場したのだ。嘘うそではない。

NHKの人たちも膝を叩いて彼女の名演技には感心していた。

もう一匹の犬はクウというて、オスだ。これはまだ年が若い。日本犬だと言って友人が置いていったものだが、何という日本犬か私にはわからん。茶色くて、耳が立っていて、口の下に黒い斑点があるために、チヨボ髭をはやした下品なオッさんのように見える。

なぜクウ、という名をつけたかって？ よく食うからクウと名づけたまでである。シロのほうだってしろいからシロ。簡単明瞭、単純無比。さっぱりしたものである。もつともシロは十二年の間にうすぎたない古綿のような色に変ったが、今更、フルワタとも呼べはしない。

クウはチヨボ髭はやした下品なオッさんのような顔をしていると書いたが、性格も上品とはいえない。雑種のシロが誰彼の見さかいなくやたらに尻っぽをふるのにたいし、こっちは日本犬の特徴かいつもムツとして、主人の私にも愛嬌をふりまいたこともない。魚の骨をくれてやっても嬉しそうな顔もせぬ。日本人の男性と同様に喜怒哀楽の表情に乏しいのだ。そのくせ感情が欠如しているのかと言えば、そうでもないらしく、散歩につれて出ると、通りすがりの娘さんのスカートのなかに突然、顔をつっこんだりする。顔も下品だが性格も下品で、日本男性的ムツツリ助平と言うのかもし

れぬ。

三日前、このクウをつれて散歩をしていた。都内とちごうてわが家の周りはまだ林や空地が多いが、それでも犬をつれて歩く時は、スコップとビニール袋を手にして歩かねばならん。犬が糞くそをすれば、そのスコップでその糞をすくい、ビニール袋に入れて始末せよというのが警察のお達しだからである。

正直いって私はクウを連れて歩くのが好きではない。シロとちごうて、こ奴は糞をするのに素直でないからである。まず林のなかをあちこちと嗅かぎまわり、便を催す地点を探すまでウロウロとして、ようやく尻しりをかがめたかと思うと、たちまち気持を変えて歩きだす。そのたび毎ごとに私は彼に鎖で引つ張られたまま林を右往左往し、茨いばらに足をひっかけ、樹の枝に顔をぶつけるからである。ようやく尻をおちつけたと思うと、彼は力ちからむのである。力みながら白眼をむいて私を見る。その表情とその恰好かっこうを見ると、私はいつもなぜか生きるのがイヤになるような気がするのだ。

秋くれて糞する犬の顔かなし

と私はある年、そんな句を作ったが、本当は「秋くれて糞する犬の顔ひどし」と言いたかったくらいである。その上、腐った芋いものような糞をスコップですくい、ビニ―

ル袋に入れるのも不快で、告白すると人が見ていない時はそのまま遁走したことも数度ある。

その日もクウは林のなかをウロウロとしていたが場所がどうしても気に入らなかつたらしく、私を鎖で引つ張ったまま、林の外の路を歩きだした。それから何を思いつけん、林から百米ほど離れた、まだ建ったばかりの洋菓子のような小さな家の門前で、突如として尻をかがめたのである。

叱る間もなかった。彼は白眼をむき、小芋のようなものを二つ、三つそこに散らした。狼狽した私は鎖を引いたが、奴は脚をふんばったまま、動かない。

その時、家の玄関があいた。眼鏡をかけたインテリ風の男が出てきた。やせて頬骨の出た彼は、まず私を疑わしげに見つめ、クウを眺め、それから門前にころがっている二つ、三つの黄褐色のものに眼をやった。

「あッ。なんだ。こりや、一体」

みるみるうちに怒りの表情に変わり、

「あなた、……意識的に犬にここで排便させたのですか」

「とんでもない、意識的だ、なんて。こいつが止める間もなく、やったんです」
しどろもどろの答えに相手は、

「林があるじゃありませんか。あそこでなぜ、させない」

「それが……あそこじゃ……しなかったんです」

「だから、ここで、させたと言うのですか。あなたには市民意識とモラル心があるのですか」

そうたまたまかけてきた。こちらは額に汗をかいて、ただあやまるより仕方がなかった。相手の舌の回転はなめらかで、私にはとても太刀打ちできない。

「掃除してください。あたりまえでしょ」

「掃除しますよ、すりゃ良いんでしょ」

売り言葉に買い言葉で私も思わずムツとして、荒々しくスコップで柔らかいクウの糞をすくいビニール袋に入れた。その間、彼は監視するようにじっと私の動作を見つづけていた。作業を終った時、彼は、

「こんな人がいるから日本の民主主義は育たないのだ」

と吐き棄てるように言い、ドアをボタンとして姿を消した。馬鹿野郎、なにが民主主義だ、と言う言葉が思わず口から出かったが、既に彼は家に入った後である。

クウにあたり散らしながら帰宅したが腹の虫はおさまらぬ。なるほど門前で犬に糞をさせたのはこちらの落度である。とはいえ、あのように市民意識がないとか、モラ

ル心が欠如しているとまで痛罵つうばされては頭にくるのは当然だ。

「おい」

玄関に入るなり私は家人に大声をあげた。

「林のそばに新しい家が出来たろう。あそこには一体、どやつが住んでいるのだ」

「林のそば？」家人は私の見幕に不審そうに「丸田利口という表札が出ていましたわ」

丸田利口。どこかで聞いた名だなと私は思った。そういえば、この一年ぐらい急に総合雑誌などにこの名で書かれたムツかしげな評論があったようだ。

まさか、その男が私のすぐそばに家を建てたとは思えられない。私だって物書きだし、むこうもこちらの名ぐらい知っているだろう。それなら引越して来たなら来たで、菓子折の一つも持って挨拶あいさつに来てもよい筈はずである。

その日、二時間かかって最近の総合雑誌をあれこれとひっくりかえしてみた。「現代知性」という雑誌にその丸田利口の写真が載っていた。横文字の本を並べた書棚を背にしてひどく深刻な顔をして写っているのは、まぎれもなく私を侮辱したあの男だった。

(畜生)

私は大体、横文字の本を背にして写真をうつすような気障な男は嫌いである。名前にまで利口とつけるような男はなお不愉快である。そのエッセイに眼を通してみると、やたらに片仮名の外国語の単語を並べ、むやみに的という字を使っている。民主的、発展的、思想とは一体なんだ。犬が門前に糞をすれば、その飼主は非民主的で非発展的な人間なのか。

夕方、癪のあまり焼酎の水割りをガブ飲みしていると同じ市に住む編集者のM君が来た。

「また焼酎ですか。ケチですね」

若いくせにM君は時々、鼻のつまったような声を出して嫌味を言う。

「何を言うか。焼酎はどあとが残らん酒はない。健康にもいい。だから飲んでいんだ」

「本当は安いからじゃ、ありませんか」

「うるさい。それより丸田利口とは何者だ」突然、酔いを発して私は怒鳴った。

「最近、近くに引越して来たのに挨拶にも来ん。生意気な奴だ」

「へえ。近くに丸田先生、来られたのですか。知らなかったな」

「あんな奴を先生よばわりすることはない。やめろ。卑屈だぞ」

「しかし馬鹿でもチョンでも執筆者は先生と呼べと、先輩の伊東さんから言われていますから」

そう言つて彼は横をむいてチョロツと舌を出した。

「しかし丸田先生はなかなか前向きのエッセイを書くので学生に人気がありますよ。ヨーロッパ文化にも詳しいです」

「俺^{おれ}だって学生に人気があらう」

「こちらの場合は学生は学生でも中学生でしょう。ヤキモチをやいておられるのと違いますか」

とに角、私は不愉快だった。M君はその私の心を刺すような言葉を次々に口に出し、そのくせ、わが焼酎を飲んで帰っていった。

丸田利口が来てから二、三か月もしないうちに——私のヒガミ心からかも知れないが——やたらに彼の名が目につくようになった。それは私の住む市の青年会主催の講演会や、婦人読書サークルに丸田が人気のあることを示していた。

新聞と共に郵便受けに投げこまれるチラシにも時々、丸田利口の名が印刷されていることがあった。「丸田先生と教育問題を考える集り」とか「婦人の地位向上の集会。講師、丸田利口先生」という広告をそのチラシで読むたび、私は理由もなくチツ、チ